



TITLE:

京大広報 No. 624

AUTHOR(S):

京都大学広報センター

CITATION:

京都大学広報センター. 京大広報 No. 624. 京大広報 2007, 624: 2405-2424

ISSUE DATE:

2007-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196465>

RIGHT:



京大広報

No. 624

2007. 6



医学研究科人間健康科学系専攻開設記念式典
—関連記事 本文2406ページ—

目次

〈大学の動き〉	
博士学位授与式	2406
〈部局の動き〉	
医学研究科「人間健康科学系専攻」看板上掲式・	
開設記念行事を実施	2406
人文科学研究所附属現代中国研究センターの設置	2407
〈寸言〉	
出会いを大切に	森 詳介 2408
〈随想〉	
体育のすすめ	名誉教授 新庄輝也 2409
〈洛書〉	
技術の進歩と失われる知恵	宮下英明 2410
〈荣誉〉	
小林四郎名誉教授、堀内 昶名誉教授、	
白石 隆名誉教授が紫綬褒章を受章	2411
〈資料〉	
平成19年度入学試験諸統計	2413
〈訃報〉	2418
〈話題〉	
宇治キャンパスで安全衛生教育を実施	2419
〈公開講座〉	
人文科学研究所夏期公開講座 名作再読	
—いま読んだらこんなに面白い(2)—	2420
平成19年度(第71回)	
農林経済・経営・簿記講習会	2420
再生医科学研究所第2回公開講演会	2421
フィールド科学教育研究センター公開講座 2007	
森のしくみとその役割	2421
数理解析研究所数学入門公開講座	2422
理学研究科数学教室公開講座「現代数学展望」	2422
〈日誌〉	2422
〈隔地施設紹介〉	
農学研究科附属農場	2423

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

博士学位授与式

5月23日(水)午前10時30分から、時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長、東山紘久理事・副学長(教育・学生担当)をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に学位記(5月23日付)が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時10分終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。

総長式辞は総長室ホームページをご覧ください。

http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_sou/070523_1.htm

学 位	課程博士	論文博士	計	学 位	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	2	—	2	博士(工学)	5	2	7
博士(教育学)	—	3	3	博士(農学)	7	2	9
博士(法学)	—	—	—	博士(人間・環境学)	—	—	—
博士(経済学)	5	2	7	博士(エネルギー科学)	—	—	—
博士(理学)	7	4	11	博士(地域研究)	—	—	—
博士(医学)	17	4	21	博士(情報学)	1	—	1
博士(社会健康医学)	2	—	2	博士(生命科学)	3	—	3
博士(薬学)	—	—	—	博士(地球環境学)	—	—	—
				計	49	17	66



部局の動き

医学研究科「人間健康科学系専攻」看板上掲式・開設記念行事を実施

医学研究科では、本年4月に開設された人間健康科学系専攻の看板上掲式および開設記念行事を5月14日(月)に実施した。同専攻は、医学部保健学科を母体として設置された。健康科学をさらに発展させ、人の真の健康を創生するため、医学をはじめとする自然科学ならびに人文・社会科学を基盤とし、全人的視野に立って医療・保健・福祉を深く考察した「人間健康科学」の理論を構築し、実践の方法と技術を確立させることにより、高度先進医療に対応で

きる高度医療専門職の育成と将来の教育者・研究者を志す人材の養成を目指す。

玄関前で行われた看板上掲式の後、人々の健康を願い、新専攻が末永く発展し、多くの実りがあるようにとの願いを込めて「ゆずの木」が植樹された。

この後、場所を時計台記念館に移し、記念講演会、記念式典、記念祝賀会を行った。記念講演会には、一般を含め約400人の参加があり、尾池和夫総長、本庶 佑総合科学技術会議議員の講演、京都大学交

響楽団と関西21世紀交響楽団による祝賀演奏が行われた。岡本道雄元総長、西島安則元総長、井村裕夫元総長、三浦公嗣文部科学省高等教育局医学教育課長ら関係者約100人が出席した記念式典では、来賓の皆様からの祝辞があり、新専攻への大きな期待が述べられた。また、引き続き行われた記念祝賀会では、約150人の参加のもとになごやかな雰囲気の中、新専攻の門出を祝った。



玄関前で行われた看板上掲式

(大学院医学研究科)

人文科学研究所附属現代中国研究センターの設置

人文科学研究所は、現代中国についての総合研究を重点的に推進するとともに、京都大学における現代中国研究者が持続的な共同研究を推進するための拠点を構築することを目的として、平成19年4月1日付で附属現代中国研究センターを設置した。

本センターは、現代中国政治、経済、社会、文化の4研究分野を設け、全学的な人文科学・社会科学の統合的研究体制の構築による「深みのある現代中国研究」を強力に推進することを目標としており、文学研究科、経済学研究科、人間・環境学研究科などの諸部局で現代中国研究に従事している研究者を兼任の形で受け入れている。

本センターの発足により、学内は言うまでもなく、関西地区における現代中国研究を積極的に統合していく学術・情報のハブとしての機能を持つことが期待される。また、従来、国外の現代中国研究者、研究機関と本学の学術交流は、主に個々の研究者を通して行われてきたが、本センターが本学の現代中国

研究に関する明確な拠点となることにより、国内はもとより、欧米、中国の主要機関とのグローバルな連携が強化され、国際的な中国研究の情報収集や情報発信が積極的に行えることになる。

また、本センターは、人間文化研究機構が実施している「地域研究推進事業」の一つである「現代中国地域研究」の研究拠点(全国で6カ所)の一つに選定され、今後5年間、人間文化研究機構と協力して現代中国研究を推進することになる。

本センターの設立を記念して5月31日(木)に「設立記念公開講演会—京都モデルの現代中国研究をめざして—」を開催し、金 文京所長の挨拶、丸山正樹理事・副学長の祝辞に続いて、森 時彦センター長(題目：京大人文研の中国近現代史研究)、王汎森 台湾 中央研究院歴史語言研究所長(題目：現代中国思想文化の底流)、汪朝光 中国社会科学院近代史研究所研究員・民国史研究室主任(題目：21世紀の民国史研究へ向けて)の3氏が講演を行った。



王汎森 台湾 中央研究院歴史語言研究所長の講演



汪朝光 中国社会科学院近代史研究所研究員・民国史研究室主任の講演

(人文科学研究所)

寸言

出会いを大切に

森 詳介



私が入学したのは昭和34年。高度経済成長期のとば口となった、いわゆる「岩戸景気」に沸く時期だった。高校時代、数学と物理が好きだったこともあり、わが国産業の屋台骨である「モノづくり」と、それを支える「技術」を学ぼうと、工学部の電気工学科に進んだ。

と言うと格好が良いが、高校で柔道部に所属していた私は、京大から稽古をつけに来てくれていた先輩の話を聞くうち、いつしか、質実でありながら活気あふれる雰囲気の京大柔道部に憧れを抱くようになった。これが志望の大きな動機となったというのが、正直なところだ。そんなわけで、入学後は、柔道中心の学生生活だった。

当時、柔道も本格的な国際化時代を迎え、昭和39年の東京五輪の正式種目となることが決まり、3回生の時には、オランダのヘーシンクさんが、外国人初の世界選手権者となる、そんな時代だった。

私が入った年に、我が柔道部は七大戦で優勝した。翌年には、慢心してろくな練習もせず、東大戦に臨み、まさかの敗戦を喫して、全員頭を丸めて夜行列車で東京から帰ってきた。不斷の努力がいかにか大切かを思い知らされた苦い思い出だ。

そんな柔道部生活のなかで、何よりの収穫は、良き師範、先輩、友人、後輩に恵まれて、心身ともに成長し、生涯の友を得ることができたことだ。その意味では、「わが学生生活に悔いなし」と言いたいところだが、一つだけ悔いがある。

それは当時、京大柔道部では、全員白帯ながら全国大会を制した津山旧制中学の快拳を引き合いに、実力さえあれば、「段」なんかどうでもいいんだと皆思っていたため、昇段試験を受けなかったことだ。しかし、資格を目指すことは、成長のモチベーションになるし、資格取得後もそのレベルに恥じないよう、努力を続けることになるから、是非チャレンジすべきである。今は、そう思っている。

そんな学生時代を過ごした私も、いよいよ4回生となり、就職活動を開始した。いろんな先輩に話を聞くなかで、新鮮な驚きと感銘を受けたのが、電力需給が極度に逼迫するなか、資本金の3倍もの費用

をかけて、黒部川第四発電所の建設にチャレンジし、いろんな苦難を全社員の力で乗り越え、その完遂間近という関西電力の話だった。「今後も日本が成長していくなかで、非常におもしろいし、やりがいがある仕事だから、入ったらどうや」という、先輩の言葉にも推され、お世話になることになった。

果たして、入社後は、電気設備関係はもちろん、営業から企画まで、実にいろいろな分野で、貴重な経験を積ませてもらった。

入社して数年目に、ある変電所の新設工事を設計から施工管理まで任せられた。今思い出しても冷や汗が出るような失敗もしたが、多くの人に助けられながら、なんとか最後までやり遂げることができた。私自身の実践的な技術の基礎を養うことができたのはもちろん、「ライフラインを担っているんだ」と思いを強く自覚した最初の体験だった。未熟な私に、大きな仕事を任せてくれた上司や、陰になり日向になり支えてくれた先輩方には、今でも感謝している。

また、石油危機の時には、石油や資材の価格が高騰し、電力需要は減少。私は設備を計画する部署にいたが、それまでの設備増強から工事計画の大幅修正へとベクトルが180度変わり、業務は繁忙を極めた。こうした時代の大きな変わり目のなかで、苦楽をともにした仲間とは、深い絆が生まれ、30年以上経った今も、泊りがけの交流を続けている。

今では、関西電力は、安全を最優先に、安心・快適・経済的で環境にも優しい電気をお客さまにお届けする、というコアの事業ばかりでなく、ガスも販売しているし、光ファイバーを使った情報通信サービスやホーム・セキュリティサービスも提供している。さらには海外にも事業を展開するようになっていくが、これらすべてを支えているのは社員をはじめとした「人」である。苦難を乗り越えチャレンジを続けるという伝統のなか、若い人にも大いに活躍できる場があり、その期待に応えるべく皆が頑張ってくれている。

こうして振り返ると、学生生活でも会社生活でも、数え切れないほどの方に支えられてきたということを改めて実感する。やはり、一人ではできないことには限りがある。学生の皆さんには、勉強やクラブにとどまらず、人との出会いを大切にして、一生つきあえるような友を見つけてほしいと思う。

(もり しょうすけ 関西電力株式会社取締役社長 昭和38年工学部卒)

随想

体育のすすめ

名誉教授 新庄 輝也

「精神的に不安定な学生が増えている原因は、体育実技を必須からはずしたせいだ」という意見を聞いたので、大学における体育の意義について考えてみた。法人化後の大学では財政面の圧迫もあって体育は軽視され、いずれは大学のスポーツ施設はなくなるのではないかと心配されるが、体力面でも人格面でも未発達な若い学生を円満な人間に育てるためにはスポーツの体験が有益であり、ぜひ体育実技を存続させてほしい。運動はおろか、集団で遊ぶことさえしていない学生には、精神状態を安定化するために体育が有効である。大勢の学生に履修させるには体育実技が「楽しい時間」であることが必要であり、体育実技の内容を楽しいものにする工夫を大学側に望みたい。



次に体育会の体育について。私は学生時代4年間テニス部に在籍した。そのために勉強が不足した点には後悔もあるが、テニスから得たものは非常に大きい。今でも「特技はテニス」といって通用するのはテニス部での修練のおかげである。週一回のテニスで健康の維持に心がけるほか、テニス部OBの会や55歳以上が参加する7大学OB戦にも出場している。学内は勿論、学外あるいは外国にもテニスで得た知己は数多い。運動部に入ればその種目についての技術を習得できるだけでなく、対外試合など忘れられない思い出が残る。自ら設定した目標に向かって努力し、その結果が達成感につながるという体験はまさに財産である。現代の若者には団体生活の有意義は大きい。運動部という小さな模擬的社会で、まず人に命令されることを体験し、後には人に命令し、集団を統率する経験ができる。学生には自由が溢れており、なんの束縛もなしに4年間を過ごすこともできるが、運動部に入って「我慢」できる人間になることが社会に出てから大いに役立つので、ぜひ大勢の学生に体育会の運動部を体験してほしい。

一方、大学内で体育会の存在意義を確固たるものにするには、体育会の施設を一般学生に開放する機会を増やす必要がある。現在は新生全員に体育会

入会を勧誘しているようであるが、運動部に入る学生は別として、何のメリットも与えずに一般学生から入会金を取るのは無理な話である。例えば施設を一般開放する際の参加許可証を与えるなど、入会のメリットを明らかにすることが望まれる。

各運動部には部長がおり、私は10年ばかりテニス部長を務めたが、学生には部長の役割がなにかが理解できていないし、部長自身もほとんどわかっていない。「コンパに出るだけ」とか、「コンパにも出ずお金だけ出すのが良い部長」などといっている。99.9%気楽な仕事に違いないが、万が一の不祥事や事故に巻き込まれると大変な立場に立たされるおそれがある。テニスに関連した古い話を一つ紹介する。三高科学機器展という催しの中に運動部コーナーがあり、テニス部ゆかりの展示品が一高あての「詫び状」なるものであることを発見して驚いたことがある。乱闘傷害事件が発生し、三高の引率教官は責任をとって辞職したというから穏やかではない。事情を知る先輩を探した結果、次のような顛末が明らかになった。当時一高三高対抗戦は4種目について行われたが、昭和10年の三高は既に3種目に敗退し、全敗の汚名を免れるにはどうしても最終のテニスで勝つ必要があった。それぞれ約百名の応援団の見守る中で大熱戦が展開されたが、一時は優勢に見えた三高が逆転され、敗色濃厚になったとき、たまりかねた三高応援団がコートに乱入し、大の字に寝そべて試合進行を阻止する暴挙に出た。三高テニス部は棄権敗退を認めて退場したが応援団どうしのいがみ合いは納まらず、ついには大乱闘となって多数の負傷者がでた、という。つまり真相は応援団の不祥事であり、テニス部には全く責任のない事件であった。三高の歴史を管理しておられる方にはそのむねの訂正をお願いしておきたい。

愛校心も脱線すると迷惑でしかないが、スポーツの応援を通じて愛校心が育成されることは確かであり、かつてアメリカンフットボールの試合の応援で愛校心が高揚されたことを記憶する人は多い。結論として、多数の京大生がスポーツに親しむこと、および体育会内に全国レベルの実力を持つ運動部のビークが次々と現れることを望みたい。

(しんじょう てるや 元化学研究所教授 平成14年退官、専門は磁性体物性)

洛書

技術の進歩と失われる知恵

宮下 英明

京都市東洞院御池通の北西角に、黒壁の立派な旧家がある。かつて商家を営んでいた嶋臺である。明治16年に建築された建物は、切妻造、平入で、横長の虫籠窓や1階の格子など、いずれも代表的な近代京町家建築である。異蔵は丁寧な漆喰塗の2階建土蔵となっており、都会の中の幽玄な空間である。国の登録有形文化財にも指定されている、先人の知恵と技の詰まったこの建物を会場にして、地球環境学堂・学舎・三才学林の企画・運営による「はん^{しまだいじゅく}なり京都嶋臺塾」が開催されている。

「はん^{しまだいじゅく}なり京都嶋臺塾」は、我々の大学院と地域社会との重要な協働事業である。学堂教員の研究成果を紹介してご批判を仰ぐだけでなく、京都を中心に様々な活動をされている方々にもご講話をいただいて、おいでいただいた方々を含め会場全体で意見交換を行う。このような交流を通じて、世界環境都市にふさわしい京都の美意識やことば、生活文化をさぐり、また考えること、さらに、地球環境学にかかわる新しい研究・教育のあり方を構築することを目的としている。

私は先日、第8回の嶋臺塾で「生物の色」と題して、植物や藻類の葉緑素(クロロフィル)の色と生物進化の歴史について話題提供させていただいた。葉緑素には、クロロフィルa、b、c、dなどがある。ひとこと「緑」といっても青緑、黄緑、鶯色、緑など微妙に違う。これらの色素は、30億年以上の長い時間をかけて光合成生物がつくりあげ、また改良してきたものである。その結果、光合成生物が繁茂して今の地球生態系が創られ、維持されている。おそらく聞いたことはあっても実際には見たことがない葉緑素の色について、溶媒に溶かした色素を持参して、それぞれの色を見比べながらお話させていただいた。

私の話はともかく、もう一人の講師、藤井健三氏((財)西陣織物館、顧問)の「京の色」と題したお話に



私は驚嘆した。失われてしまった平安時代以前の染色技法の再現によって明らかにされたことは、千年以上前の技法が、50年、100年単位で蓄積されてきた創意工夫、観察力、洞察力に裏打ちされた先人の洗練された知恵と技の集成であることである。明治期以降に外国人技師によって伝えられた合理的な植物色素利用法の導入や、大正・昭和期にかけての化学染料の拡大とともに、古くから伝えられてきた日本固有の染色技法が忘れられてしまったそうである。藤井氏は、古文書を手がかりにその再現を試みられている。お話の一例をご紹介しますと、「延喜式」から解き明かされた茜の染め方は、現代に伝わる技法よりも、より純粋にプルプリン(ピンクの色素)だけを取り出して染める方法だったそうである。「まず、茜の根を炊く。このときの沸点は、95～96℃位。ここで雑色素のムンジスチンとかタンニンを流し出す。プルプリンは約100℃近くでないと溶出しないので、おかゆをつくって、その中でさらに茜の根を炊く。そうすると沸点が99℃近くまで上がり、プルプリンが溶出する。このままでは染められないので、これを27～28℃で何日かけて保温する。このときに乳酸発酵が起る。おかゆが分解されて粘度が下がると同時に、酸っぱくなり色素が還元されて水に溶け出す。さらに液が弱酸性になることで絹が一番染まりやすい状態になり、茜が染められる。」現代の科学から見れば色素の化学的な特性と、微生物による発酵現象を巧みに利用する高度で複雑な技と理解できる。

技術の発展は、一見すべて進歩的にみえる。しかし一方で、それがなかった時代の知恵を忘れさせてしまう。「地球環境に調和した生き方」も同じであろう。自然の中の一部として生きてきた人類が、地球環境をも脅かす存在になりつつある現在、先人の残した知恵を掘り起こし、活用することも必要なのだろう。京都を代表する旧家において、先人の技の巧みに感嘆すると同時に、技術の発展とともに消滅してしまう知恵の大切さについて考えさせられた。

(みやした ひであき 地球環境学堂／人間・環境学研究科准教授 専門は、微細藻類学、微生物生態学)

栄誉

小林四郎名誉教授、堀内 昶^{ひさし}名誉教授、白石 隆名誉教授が紫綬褒章を受章

このたび、我が国学術の発展のため顕著な功績を挙げたことにより、小林四郎名誉教授、堀内 昶^{ひさし}名誉教授、白石 隆名誉教授が4月29日（日）に紫綬褒章を受章されました。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

小林四郎名誉教授は、昭和39年京都大学工学部合成化学科卒業、同41年同大学大学院工学研究科修士課程修了、博士課程に進学し、同44年京都大学工学博士の学位を授与された。昭和44年から同46年までケース・ウェスタン・リザーブ大学博士研究員、同47年京都大学工学部助手、同60年同学部講師、同61年東北大学工学部教授を経て、平成9年京都大学大学院工学研究科に配置換、同17年に定年退職し京都大学名誉教授の称号が授与された。本学退職後は京都工芸繊維大学特任教授となり今日に至っている。



同名誉教授は、永年にわたって高分子化学の教育、研究に努め、特に有機化学に立脚した新規高分子合成手法の開拓とそれを利用する高分子新材料の開発に力を入れ、幾多の独創的研究成果を生み出し、日本の高分子合成分野の研究水準の向上に貢献している。

同名誉教授は、ヘテロ原子を含む環状モノマーの新規開環重合反応を開発し、新しい高分子材料へ展開した。新触媒としての超強酸エステル^①の発見、無

触媒共重合による数々の交互および周期重合反応の開拓等は先導的研究の好例である。また、低原子価化学種の還元能を反応駆動力とする新共重合反応を開拓した。これにより、開環閉環交互共重合、官能基移動共重合、脱酸素共重合、1:1:α 周期重合等、反応の新概念を提唱し、特異な高分子材料合成の新手法として注目されている。さらに、セルロースのような複雑な構造をもつ天然高分子の合成を、独自の着想により酵素触媒の特徴を巧みに活かした高分子合成反応(酵素触媒重合)の新手法を開拓した。その系統的な研究展開により高分子合成の一般手法として新領域を創設し、本領域における最新の世界的な研究の隆盛をもたらした。

これら一連の研究業績に対し、高分子学会賞、セルロース学会賞、フンボルト研究賞、日本化学会進歩賞、服部報公会報公賞、ストーファー・レクチャー賞^②が授与された。活動は国際的にも活発であり、ノルトライン-ウェストファーリア州科学アカデミー-外国人アカデミー会員に推挙され、また、マックス・プランク研究所の科学顧問を務めている。

(大学院工学研究科)

堀内 昶^{ひさし}名誉教授は、昭和40年に東京大学理学部を卒業、同大学大学院理学系研究科に進学し、同45年に理学博士の学位を授与された。その後、昭和45年京都大学基礎物理学研究所助手、同48年同理学部助手、同52年同助教授、平成7年大学院理学研究科助教授に配置換、同8年同教授に就任、同18年に定年退職後、京都大学名誉教授となり、同年より大阪大学核物理研究センターの協力研究員として研究活動を続け、現在に至っている。



堀内名誉教授は、永年にわたり、原子核物理学の理論的研究を行い、重要な研究業績を数多く挙げ、基礎物理学の発展に大きく貢献してきた。特に、原子核の構造および反応機構の解明に力を入れ、軽い原子核のクラスター構造と反応の分野において多数の先駆的で重要な研究を行い、クラスター研究グループの指導的研究者として活躍してきた。また、原子核の構造と反応を統一的に扱うことが可能なミクロな量子多体系の新理論である反対称化分子動力学法を構築し、不安定核を含む様々な原子核の実験結果の理論的分析と予言に多大な成功をおさめるなど、原子核物理学の理論と実験の両面において大き

な貢献をしてきた。

まず、酸素、ネオン原子核の励起状態に関する反転2重項による説明により、現代的なクラスター物理の基盤を与え、次いで、共鳴群法と生成座標の方法の同等性を明らかにし、微視的クラスター模型による研究の隆盛をもたらした。その後、多体クラスター模型の構築や、原子核間ポテンシャルの微視的な理解などの研究を進め、原子核の性質を理解する上で平均一体場の形成とともに離合集散のダイナミクスが本質的に重要であることを明確にし、その結果、軽い原子核においてクラスター構造は、殻構造に並ぶ基本的な要素と考えられるに至った。更に、原子核衝突のシミュレーションを用いた研究へと進み、重イオン衝突の初期段階からフラグメント生成に至る過程を、平均場ダイナミクスからクラスター形成に至る相関構造の変化と捉え、量子力学的な分子動力学理論である反対称化分子動力学法を構築し、原子核物質の性質や多重破碎過程を理論的に解

明するとともに、不安定核を含む様々な原子核の実験結果の理論的分析を行い、殻構造やクラスター構造など、原子核の多様な存在形態を、よりミクロな自由度から解明するなど、原子核物理学の重要で新たな潮流を切り拓いてきた。

数多くの国際会議において招待講演や基調講演を行い、自らも4回の国際会議を主催し、国内では、京都大学基礎物理学研究所、大阪大学核物理研究センター、理化学研究所、湯川財団、理論物理学刊行会の運営に携わるなど、国内外での原子核物理分野の発展と基礎科学の発展に広く貢献している。

これら一連の業績が高く評価され、平成8年に日本物理学会論文賞、同12年に仁科記念賞を受賞されている。これらに続いての今回の紫綬褒章受章は、まことに喜ばしいことである。

(大学院理学研究科)

白石 隆名誉教授は、昭和47年に東京大学教養学部を卒業後、同大学助手、助教授を経て、同62年にはコーネル大学助教授、平成8年1月に同教授に就任した後、同年7月に京都大学東南アジア研究センター教授に着任した。平成17年退職し、京都大学名誉教授となった。



同名誉教授の業績は、歴史的視点からインドネシアを中心とした東南アジア、さらにはアジアの政治秩序の有り様を立体的に浮かび上がらせたこと、更には東アジア共同体の底流にある社会・経済・文化的な同一化の動きを多面的に分析したことである。

インドネシア政治研究では、主著に *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912 - 1926* (1991年大平正芳記念賞受賞)、『インドネシア 国家と政治』(1992年サントリー学芸賞受賞)、『スカルノとスハルト』がある。また、東南アジア、広くはアジアに関する研究では、カツェンスタインとの編著 *Network Power: Japan and Asia*、それに続く *Beyond Japan: The Dynamics of East Asian Regionalism*、更には『海の帝国 アジアをどう考え

るか』(2000年読売・吉野作造賞受賞)が代表的作品である。

こうした顕著な学術的業績と並んで、コーネル大学発行の *Indonesia* 誌の編集者(1987年～)、シンガポール東南アジア研究所発行の *Sojourn* 誌(1999年～)のアドバイザーボードメンバーになるなど、東南アジア地域研究の学術的発展に努めた。国内では財務省・東アジア研究会委員、中央教育審議会大学分科会専門委員などの公的機関委員、読売新聞客員研究員などの民間団体の役職につき、日本と東南アジア関係について政策的提言を積極的に行ってきた。東南アジア研究所においては、日本とタイの間の日本学術振興会拠点大学方式による学術交流事業(1999年～)のコーディネーターとして、また共同研究「知的ヘゲモニーの構造(仕掛け)－テクノクラシー」および「東アジアにおける中産階級」のリーダーとして強い指導力を発揮し、京都大学東南アジア研究所のみならず、日本の東南アジア地域研究の国際的存在感を高める上で重要な役割を果たした。本受賞は東南アジア地域研究に対するこうした成果と貢献が高く評価されたことによる。

(東南アジア研究所)

資料

平成19年度入学試験諸統計

1. 募集人数・志願者数・合格者数・入学者数等調

学部・日程		募集人数	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学辞退者数	追加合格者数	入学者数
総合人間学部	前期(文系)	65 ^人	241 ^人	240 ^人	239 ^人	68 ^人			124 ^人
	前期(理系)	55	152	152	151	56			
文学部	前期	220	629	629	617	223			223
教育学部	前期(文系)	50	178	178	172	51			61
	前期(理系)	10	27	27	27	10			
法学部	前期	320	867	867	858	332			332
経済学部	前期(一般)	180	512	512	501	191	3		238
	前期(論文)	50	302	175	168	50			
理学部	前期	311	812	796	789	318	1		317
医学部	前期	223	604	573	561	237	5		256
	後期	20	146	146	59	24			
薬学部	前期	80	223	223	217	86			86
工学部	前期	955	2,221	2,221	2,189	960	3	1	958
農学部	前期	300	634	634	629	322			322
小計	前期	2,819	7,402	7,227	7,118	2,904			
	後期	20	146	146	59	24			
合計		2,839	7,548	7,373	7,177	2,928	12	1	2,917

〔外国学校出身者のための選考の実施結果（外数）〕

学部	募集人数	志願者数	第1次選考合格者数	受験者数	合格者数	入学辞退者数	入学者数
法学部	10名以内	39 ^人	21 ^人	11 ^人	5 ^人	1 ^人	4 ^人
経済学部	10名以内	49	21	13	7	1	6

〈医学部・薬学部学科・専攻別内訳〉

学部・日程		募集人数	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学 辞退者数	追加 合格者数	入学者数
医学部	前期	223 ^人	604 ^人	573 ^人	561 ^人	237 ^人	5 ^人		256 ^人
	後期	20	146	146	59	24			
医学科	前期	100	344	313	310	105			105
保健学科	前期	123	260	260	251	132	5		151
	後期	20	146	146	59	24			
看護学専攻	前期	63	122	122	118	70	4		73
	後期	7	47	47	13	7			
検査技術科学専攻	前期	30	74	74	72	30			40
	後期	7	51	51	23	10			
理学療法学専攻	前期	15	37	37	37	17			20
	後期	3	19	19	9	3			
作業療法学専攻	前期	15	27	27	24	15	1		18
	後期	3	29	29	14	4			
薬学部	前期	80	223	223	217	86			86
薬科学科	前期	50	113	113	109	55			55
薬学科	前期	30	110	110	108	31			31

〈工学部・農学部学科別内訳〉

学部・日程		募集人数	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学 辞退者数	追加 合格者数	入学者数
工学部	前期	955 ^人	2,221 ^人	2,221 ^人	2,189 ^人	960 ^人	3 ^人	1 ^人	958 ^人
地球工学科	前期	185	464	464	460	186	1		185
建築学科	前期	80	190	190	187	80			80
物理工学科	前期	235	522	522	517	238			238
電気電子工学科	前期	130	267	267	262	130			130
情報学科	前期	90	225	225	221	90			90
工業化学科	前期	235	553	553	542	236	2	1	235
農学部	前期	300	634	634	629	322			322
資源生物科学科	前期	94				99			99
応用生命科学科	前期	47				49			49
地域環境工学科	前期	37				42			42
食料・環境経済学科	前期	32				35			35
森林科学科	前期	57				60			60
食品生物科学科	前期	33				37			37

2. 合格者 最高点・最低点（総点）調

学 部	日 程		満 点	総 点		
				最 高 点	最 低 点	平 均 点
総 合 人 間 学 部	前 期	(文 系)	750 点	513.66 点	414.00 点	450.93 点
		(理 系)	800	611.00	388.75	450.46
文 学 部	前 期		700	524.73	427.00	457.85
教 育 学 部	前 期	(文 系)	900	646.43	551.66	584.99
		(理 系)	900	627.03	533.43	581.67
法 学 部	前 期		750	606.20	485.90	518.47
経 済 学 部	前 期	(一 般)	800	604.55	479.05	516.69
		(論 文)	1,000	740.16	461.30	509.85
理 学 部	前 期	注 1	650	556.00	313.00	359.09
		(数理 30 位) 注 2	(400)	(383.00)	(255.00)	—
医 学 部	前 期		—	—	—	—
	後 期		—	—	—	—
医学部学科別	日 程		満 点	総 点		
				最 高 点	最 低 点	平 均 点
医 学 科	前 期		1,300 点	1045.23 点	855.87 点	908.89 点
保健学科看護学専攻			1,200	865.26	548.73	643.95
保健学科検査技術科学専攻			1,200	823.70	659.70	704.25
保健学科理学療法科学専攻			1,200	843.90	692.73	737.48
保健学科作業療法科学専攻			1,400	903.70	673.53	780.81
保健学科看護学専攻	後 期		1,000	851.00	777.90	821.97
保健学科検査技術科学専攻			1,000	832.80	793.30	810.17
保健学科理学療法科学専攻			1,000	834.70	830.50	832.07
保健学科作業療法科学専攻			1,200	927.00	878.60	899.95
薬 学 部	前 期		950	693.25	530.33	586.46
薬学部学科別	日 程		満 点	総 点		
				最 高 点	最 低 点	平 均 点
薬 科 学 科	前 期		950 点	693.25 点	530.33 点	588.16 点
薬 学 科			950	647.60	552.90	583.46
工 学 部	前 期		—	—	—	—
工学部学科別	日 程		満 点	総 点		
				最 高 点	最 低 点	平 均 点
地 球 工 学 科	前 期		1,000 点	693.63 点	534.25 点	582.15 点
建 築 学 科			1,050	773.98	566.85	626.06
物 理 工 学 科	前 期	(配 点 A)	1,000	754.00	607.33	649.97
		(配 点 B)	1,000	695.00	558.13	608.72
電 気 電 子 工 学 科	前 期	(配 点 A)	1,000	680.69	574.76	616.73
		(配 点 B)	1,000	661.53	506.35	561.04
情 報 学 科	前 期		1,000	800.28	542.20	604.55
工 業 化 学 科			1,000	747.66	518.31	578.09
農 学 部	前 期		1,050	793.23	571.48	630.03

注1：最高点は合格者のうち総点が最も高い者の得点である。最低点は合格者のうち順位が最下位であった者の得点である。平均点は合格者の総点の平均点である。

注2：合格者のうち個別学力検査の成績順位が「数学」と「理科」の得点合計を用いて定められる30位までの者の「数学」と「理科」の得点合計。

(備考) 1) 法学部・経済学部の外国学校出身者のための選考を除く。
2) 総点については、前期・後期共合格発表時のものである。

3. 志願者・入学者 出身高校等所在都道府県別調

上段…志願者数
下段…入学者数

都道府県	学 部										計
	総合 人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	
北海道	13 5	11 4	9 3	12 4	6 2	16 4	5 3	3 1	28 9	7 5	110 36
東 北	青 森	1		1		2	4 3	2 1	5 1	2 2	18 7
	岩 手	1		1	1	2	3 1		2		10 1
	宮 城	2	4 2	2	1	4	9 3	5	1 5	12 2	44 12
	秋 田	2 1	1		1		1	1	3 1	1	11 3
	山 形	1 1	5 1	1	1	3	2 2	2 2	5		20 3
	福 島	1 1	1		2 1	4 2	6 4		1 1	7 1	24 10
	茨 城	8 4	8 1	3 2	5 2	13 1	5 2	3 1	1 5	9 2	60 20
関 東	栃 木	2 1	2	1		3	4 1	5 3	10 4	4 4	31 13
	群 馬	5 1	7 5	2 1	4 3	7 1	13 6		2 1	12 6	1 25
	埼 玉	6	12 2	3 1	7 3	18 5	10 3	2 1	4 7	26 2	4 24
	千 葉	5	9	4	1 1	12 2	20 5	7 1	4 2	19 6	11 3
	東 京	34 13	39 12	12 4	33 11	69 5	60 14	23 2	11 3	54 16	28 12
	神奈川	12 1	18 5	6 2	18 1	28 4	20 6	10 2	2 1	30 6	10 5
	新 潟	1 1	3 1		4 1	3 1	8 7	5 1	1 1	8 2	
中 部	富 山	1	6 3	1	2 2	6 2	5 3	5 2	16 6	2 2	44 21
	石 川	6 3	12 6	6 3	8 4	6 2	8 4	9 4	2 1	30 16	9 6
	福 井	5 4	8 3	3 2	9 3	6 2	12 5	12 5	3 2	26 10	1 37
	山 梨	2	3 1		1	3 1	6 3			4 2	2 8
	長 野	7 3	3		9 1	4 5	11 5	7 1	1 4	11 3	6 17
	岐 阜	7 5	14 6	2	18 7	10 2	21 6	14 5	2 1	45 19	7 4
	静 岡	15 6	16 2		11 3	15 4	27 12	9 2	8 5	45 18	10 4
東 部	愛 知	19 4	35 12	13 7	47 12	39 14	40 19	34 13	13 4	146 73	25 14

都道府県		学							部				計
		総合 人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農		
近 畿 道	三重	21	53	62	167	124	1611	187	52	3822	118	12967	
	滋賀	84	104	42	207	167	156	208	42	6322	209	18071	
	京都	307	5921	216	12443	9032	6930	8327	289	254118	7331	831324	
	大阪	5813	11338	3613	14365	15656	11449	15153	3919	467208	15177	1,428591	
	兵庫	3613	4920	165	9852	8428	6226	13745	218	271139	7447	848383	
	奈良	187	3716	132	8138	6930	4219	7325	178	18192	5320	584257	
	和歌山	4	106	3	136	114	61	189	1	4819	146	12851	
中 国 道	鳥取	2	21	1	21	1	71	1		52	2	236	
	島根	42	3		31		73	31	21	94	21	3313	
	岡山	62	146	5	194	93	124	82	1	278	63	10732	
	広島	155	177	81	2912	172	3215	158	84	6432	126	21792	
	山口	21	43	11	42	52	84	31	1	159	51	4824	
四 国 道	徳島	41	3	1	63	1	5	11	42	126	1	3814	
	香川	1	94	31	156	52	95	95	53	3410	106	10042	
	愛媛	2	84	11	121	91	105	73	21	229	42	7727	
	高知	21	31	1	102	42	31	61	21	102	85	4916	
九 州 道	福岡	115	3415	6	278	239	299	169	83	7623	1810	24891	
	佐賀	43	62		21	21	62	22	1	74	64	3619	
	長崎	1	41		41	4	71	2	2	134	43	4110	
	熊本	7	9	1	83	73	52	3	2	91	52	5611	
	大分	11			31	4	41	21	41	52	27	257	
	宮崎	43	62		41	21	71	21	11	31	11	3012	
	鹿児島	63	32	41	176	7	142	61		172	51	7918	
	沖縄	2			2	41	2		1	51	11	173	
	合 計		386124	625222	20161	857331	805238	802314	746256	22086	2,208957	629320	7,4792,909

(備考) 高等学校・中等教育学校以外の外国学校出身者及び
高等学校卒業程度認定試験合格者等の入学資格取得
者は除く。

4. 志願者・入学者 入学資格取得年別調

学 部	志 願 者						入 学 者					
	総数	現 役	浪 人				総数	現 役	浪 人			
		19. 3卒	18. 3卒	17. 3卒	16. 3卒	15.3以前卒		19. 3卒	18. 3卒	17. 3卒	16. 3卒	15.3以前卒
総合人間学 部	人 393	人 217	人 113	人 30	人 5	人 28	人 124	人 66	人 50	人 5	人 3	
	認 7	認 4	認 1			認 2						
	55.2%	44.8%						53.2%	46.8%			
文 学 部	629	369	209		7	16	223	127	86	8	2	
	認 3 他 1	認 2	認 1 他 1				認 1	認 1				
	58.7%	41.3%						57.0%	43.0%			
教育学部	205	126	61	10	1	7	61	36	20	3	2	
	認 3 他 1		認 2 他 1		認 1							
	61.5%	38.5%						59.0%	41.0%			
法 学 部	867	551	245	36	10	25	332	190	131	8	2	
	認 9 他 1	認 1 他 1	認 2			認 6	認 1	認 1				
	63.6%	36.4%						57.2%	42.8%			
経済学部	814	445	263	55	15	36	238	130	86	13	5	
	認 9	認 3	認 1	認 2	認 1	認 2					4	
	54.7%	45.3%						54.6%	45.4%			
理 学 部	812	507	216	40	11	38	317	212	86	13	1	
	認 10	認 7	認 2			認 1	認 3	認 1	認 1		認 1	
	62.4%	37.6%						66.9%	33.1%			
医 学 部 医 学 科	344	179	77	26	10	52	105	64	28	3	2	
	認 1		認 1								8	
	52.0%	48.0%						61.0%	39.0%			
医 学 部 保健学科	406	270	74	19	9	34	151	104	34	4	4	
	認 3	認 1	認 1			認 1					5	
	66.5%	33.5%						68.9%	31.1%			
薬 学 部	223	141	56	10	6	10	86	64	21	1		
	認 3		認 1	認 1		認 1						
	63.2%	36.8%						74.4%	25.6%			
工 学 部	2,221	1,546	524	79	22	50	958	656	283	14	2	
	認 12 他 1	認 2	認 4 他 1	認 1	認 1	認 4	認 1	認 1			3	
	69.6%	30.4%						68.5%	31.5%			
農 学 部	634	407	175	29	4	19	322	207	104	10	1	
	認 5	認 2	認 1			認 2	認 2	認 2				
	64.2%	35.8%						64.3%	35.7%			
合 計	7,548	4,758	2,013	362	100	315	2,917	1,856	929	82	18	
	認 65 他 4	認 22 他 1	認 14 他 3	認 7	認 3	認 19	認 8	認 4	認 3		認 1	
	63.0%	37.0%						63.6%	36.4%			

〔外国学校出身者のための選考に係る入学資格取得年別調（外数）〕

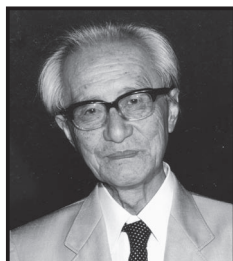
学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役	浪 人	総 数	現 役	浪 人
		18.4～19.3卒	18. 3以前卒		18.4～19.3卒	18. 3以前卒
法 学 部	人 39	人 38	人 1	人 4	人 4	人 0
		97.4%	2.6%		100.0%	0.0%
経済学部	49	45	4	6	6	0
		91.8%	8.2%		100.0%	0.0%

認…高等学校卒業程度認定試験合格者
(大学入学資格検定合格者含む)
他…その他の入学資格取得者

訃報

このたび、吉田次郎^{よしだ じろう}名誉教授、菱山^{ひしやま いづみ}泉^{いづみ}名誉教授、鈴木健二郎^{すずき けんじろう}名誉教授が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

吉田 次郎 名誉教授



吉田次郎先生は、1月21日逝去された。享年96。

先生は、昭和8年3月京都帝国大学文学部独逸文学科を卒業後、日本大学講師、甲南高等学校教授を経て、同24年8月京都大学教養部(当時分校)助教授、同25年4月教授に就任され、以来教養部において長きにわたって独語の授業を担当されるとともに、同44年4月より併せて大学院文学研究科の授業も担当された。その間、深い学識をもって研究に没頭されるとともに、円満な人格のもと後学の育成にも大いに力を注がれ、また、昭和46年4月より同47年3月まで京都大学評議員として大学の管理運営にも尽力された。

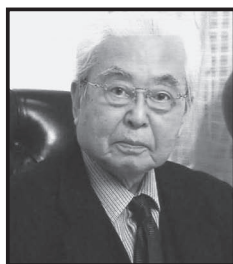
昭和48年停年により退官され、京都大学名誉教

授の称号を受けられた。

先生の研究は、ゲーテ、シラー、クライスト、ニーチェ、ケラー、ベッヒャーそしてとりわけトーマス・マンなど主として、古典期から現代までの多岐にわたるドイツ文学に向けられており、この分野で傑出した研究業績をあげるとともに、論文や小説の翻訳も数々手がけ、また、現代ドイツ語文法に関してもすぐれた著書を著しておられる。先生の研究は、当時の東ドイツの文学研究の動向をきちんとおさえたその研究姿勢のゆえもあって、国内のみならず、東ドイツからも熱い注目を浴びた。謙虚にして真摯、学生に接しては温厚といった人格は、誰からも愛され信頼された。ご冥福をお祈りする。

(大学院人間・環境学研究科)

菱山 泉 名誉教授



菱山 泉先生は、2月17日逝去された。享年83。

先生は、昭和24年京都大学経済学部を卒業後、同大学大学院(経済学)に進学された。昭和29年京都大学経済学部講師、同32年同助教授を経て、同42年同教授に就任され、経済原論講座を担当された。昭和62年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後は、昭和62年大阪産業大学経済学部教授、平成4年福井県立大学経済学部教授、同8年鹿児島経済大学(現・鹿児島国際大学)学長に就任され、学長として大学院の新設や新学部の創設などに尽力され、同15年より同大学を運営する学校法人津曲学園の理事長を務められていた。

先生の研究は、ケネー、リカードウなどの古典派経済学研究および古典派経済学の基本着想を現代経

済学に復活させることを目指したスラッフア経済学の研究と、マーシャル、ケインズなど近代経済学の本流たるケンブリッジ学派の研究という2つの流れがあり、古典と現代、正統と異端といった複眼的視点に特色がある。とくにスラッフア経済学研究では、わが国における第一人者として知られていた。またポスト・ケインジアン経済学研究の開拓者的存在でもあった。国際的に高い評価を得ているものとして、『経済表』を動学モデルで定式化したケネー研究とケインズの『確率論』と『一般理論』との関係について論じたケインズ研究がある。

また、先生は経済学史学会代表幹事を務めるなど学術の発展に寄与された。

これら一連の教育・研究の功績により、平成11年11月に勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院経済学研究科)

鈴木 健二郎 名誉教授



鈴木健二郎先生は、4月25日逝去された。享年67。

先生は、昭和37年3月京都大学工学部機械工学科を卒業、同年大学院工学研究科に進学後、同38年株式会社神戸製鋼所に入社された。昭和39年4月京都大学工学部助手に着任され、助教授を経て、同61年6月教授に就任、伝熱工学講座、熱流体工学講座を担任された。平成11年4月より3年間、大型計算機センター長、同11年12月より同14年3月まで評議員、同13年4月より2年間、留学生センター長を兼任された。平成15年定年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後は、芝浦工業大学大学院シニア教授を務められた。

先生は、永年にわたり流体力学・伝熱学・熱工学・

エネルギー工学の分野で多くの優れた業績を挙げてこられた。とりわけ、乱流の力学と制御、熱流動の数値解析、燃料電池・マイクロガスタービン複合発電に関して、世界をリードする先駆的な研究を進め、また、国際学術誌の編集者や国際学術組織の議長などとして国際学術交流に尽力された。日本伝熱学会、エネルギー・資源学会などの会長・副会長を歴任され、日本機械学会賞、International Centre for Heat and Mass Transfer Fellowship Award などを受賞された。

先生は、誠実に思いやりをもって学生や後進の指導に当たられた。その薫陶を受けた多くの者たちが、いま国の内外で活躍している。

(大学院工学研究科)

話題

宇治キャンパスで安全衛生教育を実施

宇治キャンパスでは、5月7日(月)午後2時から、宇治キャンパスで実習、研究を実施することとなった大学院生、4回生、新たに配属になった教職員等を対象に安全衛生教育を実施した。宇治地区部局長会議世話部局長である石原和弘防災研究所長の挨拶の後、宇治事業場総括安全衛生管理者の石川裕彦防災研究所教授ほか衛生委員会委員等の講師による「安全衛生管理体制」、「化学実験および化学物質管理」、「生物実験および放射線取扱」、「物理実験および計算機関係」、「フィールドワークにおける安全管理」、「廃棄物および排水」および「喫煙問題」について、現場の実態に沿った内容をもとに、研究、実験を安全に行うための講習が行われた。

実験等で発生する事故の危険度と、人的に及ぼす被害、危険の防止と安全対策に関心が寄せられ、約

260人の参加者は熱心に聞き入り午後4時15分に終了した。



(宇治地区事務部)

公開講座

人文科学研究所夏期公開講座 名作再読 ーいま読んだらこんなに面白い(2)

1. 日 時：7月14日(土) 13:00~17:00
2. 場 所：人文科学研究所本館大会議室
3. 講 師：京都大学人文科学研究所
甲南大学文学部
京都大学人文科学研究所
准教授 王寺 賢太
教 授 井野瀬久美恵
准教授 岡田 暁生
4. 定 員：100名(申込不要・無料)
5. 問い合わせ先：〒606-8501 京都市左京区吉田牛ノ宮町
京都大学人文科学研究所総務掛
TEL：075-753-6902 FAX：075-753-6903
E-mail：annai@zinbun.kyoto-u.ac.jp
詳細は人文科学研究所ホームページをご覧ください。
<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

平成19年度(第71回)農林経済・経営・簿記講習会

1. 内 容：第1クラス 農業経営におけるビジネス・マインド養成のための基礎実習(定員25名)
第2クラス 地域農業・農業経営のコーディネート ケースメソッドを用いて(定員25名)
第3クラス 食品トレーサビリティの原理と応用(ケースメソッド)(定員50名)
2. 期 日：第1クラス 平成20年1月7日(月)~9日(水)
第2クラス 平成19年7月23日(月)~25日(水)
第3クラス 平成19年7月26日(木)~28日(土)
3. 対 象：行政、団体職員、高等学校教諭、農業者、食品企業、食品関連企業、
若手研究者、大学院生、学部学生など
4. 場 所：農学部講義室等
5. 講 師：農学研究科教授 新山陽子他8名
6. 受 講 料：第1・第2・第3クラス 各9,200円
7. 申 込 方 法：開催要項および申込用紙を下記まで請求してください。
申込用紙はホームページからもダウンロード可能です。
申込書に必要事項を記入し、返信用封筒(長3規格、切手80円貼付、返信先の住所・氏名記入)
を同封のうえ申し込んでください。申込受理後、受講者決定通知および講習会案内を発送します。
8. 申 込 期 間：6月11日(月)~6月22日(金)(必着・定員になり次第メキります。)
9. 問い合わせ先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻「公開講座係」あて
TEL：075-753-6200
詳細はホームページをご覧ください。
http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_event/2008/080109_1.htm

再生医科学研究所第2回公開講演会

1. 日 時：7月28日(土) 14:00～16:10
2. 場 所：時計台記念館百周年記念ホール
3. 演題と講師：「シミュレーション医工学は面白い!？」 再生医科学研究所 教授 堤 定美
「万能幹細胞とはなかに？」 再生医科学研究所 教授 山中 伸弥
4. 定 員：500名(先着順で定員になり次第締め切ります。)
5. 受 講 料：無料
7. 申 込 方 法：E-mail, FAX, はがきで氏名(複数申込可)・連絡先(メールアドレス・電話番号・FAX
番号・住所などいずれか)を記入のうえ、下記の問い合わせ先へお申し込みください。
8. 申 込 締 切：7月23日(月)
9. 問い合わせ先：京都大学再生医科学研究所 公開講演会係
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
TEL：075-751-3802・3803 FAX：075-751-4646
E-mail：soumu@frontier.kyoto-u.ac.jp
詳細は再生医科学研究所ホームページをご覧ください。
<http://www.frontier.kyoto-u.ac.jp/>

フィールド科学教育研究センター公開講座 2007 森のしくみとその役割

- プログラム 7月26日(木)「森の講義Ⅰ 森のしくみ」
7月27日(金)「森林の観察・体験学習」
7月28日(土)「森の講義Ⅱ 森の役割」
1. 日 程：7月26日(木) 13:00～7月28日(土) 12:00(2泊3日)
 2. 会 場：フィールド科学教育研究センター 芦生研究林(京都府南丹市美山町芦生)
 3. 交 通 手 段：自家用車またはJR園部駅集合(送迎バスあり)
 4. 定 員：30名(応募者多数の場合は抽選)
 5. 受 講 料：8,200円(但し、宿泊費など別途[約17,000円]必要)
 6. 申 込 方 法：官製往復はがき(1名につき1枚)に住所、氏名、フリガナ、年齢、
性別と連絡先(電話番号・FAX番号・E-mailアドレス)、交通手段(自家用車またはJR利用)
を記入し、返信用はがきには郵便番号、宛先を記入のうえ6月30日(土)《必着》までに下記
申込先にお申し込みください。(小学生は不可、中学生は保護者同伴に限ります。)
※個人情報情報は本公開講座の運営のみに使用いたします。
 7. 申 込 ・ 問 合 せ 先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学農学研究科等教育・研究協力課研究協力掛
TEL：075-753-6411 FAX：075-753-6020
E-mail：sympo@adm.kais.kyoto-u.ac.jp
 8. そ の 他：詳細はフィールド科学教育研究センターのホームページをご覧ください。
<http://www.fserc.kais.kyoto-u.ac.jp>

数理解析研究所 数学入門公開講座

1. 期 間：7月30日(月)～8月2日(木)
(8月3日(金)に、各講師に自由に質問・討論できるオフィスアワーを設けます。)
2. 時 間：毎日10:30～16:00
3. 場 所：数理解析研究所4階大講演室
4. 演題と講師：・解けない微分方程式をめぐって 准教授 竹井 義次
・ $R=T$ 定理の仕組みとその応用 助 教 安田 正大
・プログラミング言語の意味論 助 教 勝股 審也
5. 受 講 料：7,200円
6. 受 付 期 間：6月11日(月)～7月2日(月)17:00(必着)定員(120名)になり次第締め切り
7. 問い合わせ先：京都大学数理解析研究所総務掛「数学入門公開講座」係
TEL：075-753-7203 FAX：075-753-7272
E-mail：kouza@kurims.kyoto-u.ac.jp
詳細は数理解析研究所ホームページをご覧ください。
<http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/~kenkyubu/kokai-koza/index.html>

理学研究科数学教室公開講座 「現代数学展望」

1. 期 間：8月6日(月)～8月8日(水)
2. 時 間：各日10:00～17:00(3日間)
3. 場 所：理学研究科3号館110講演室
4. 演題と講師：・平面領域でのビリヤード 教 授 宍倉 光広
・微分トポロジーへの誘い 准教授 加藤 毅
・有理数と2次多項式 助 教 川口 周
5. 受 講 料：一般 5,000円(受講決定通知後に銀行振込にて受講料を納入願います。
高校生 無料(後日返送する受講決定通知と学生証の提示が必要。)
6. 受 付 期 間：6月1日(金)～7月10日(火)
7. 問い合わせ先：京都大学大学院理学研究科数学教室 TEL：075-753-3700
詳細は理学研究科数学教室ホームページをご覧ください。
<http://www.math.kyoto-u.ac.jp/koukai.html>

日誌 2007.4.1 ～ 4.30

- | | |
|--------------|-------------|
| 4月2日 役員会 | 17日 企画委員会 |
| 4日 学生部委員会 | 〃 部局長会議 |
| 5日 名誉教授称号授与式 | 19日 人権委員会 |
| 〃 退職教授懇談会 | 20日 図書館協議会 |
| 6日 学部入学式 | 23日 役員会 |
| 〃 大学院入学式 | 24日 教育研究評議会 |
| 9日 役員会 | 25日 国際交流委員会 |
| 16日 役員会 | 〃 企画委員会 |

隔地施設 紹介



農学研究科附属農場 (<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/farm/>)

京都大学大学院農学研究科附属農場は、1924(大正13)年農学部^{こそべ}の創設にともなって北部キャンパスの農学部構内に開設され、その後変遷を重ねて、現在は大阪府高槻市八丁畷町の本場、古曽部町の古曽部温室および農学部構内の京都農場から構成されています。

1928(昭和3)年に開設された本場は、本館、別館(技術職員室)、実験棟からなっています。本館は木造で西欧的な景観を生み出し、有名な建物となっています。1998(平成10)年4月に農学部附属農場から大学院農学研究科附属農場に移行した際、農場内に植物生産管理学研究室を創設し、それまでの学部学生の実習教育に加えて、学部および大学院の専攻生の教育を担当する体制となりました。



附属農場本館

学部学生の実習教育

農業生産は人類の生存に関わる最も重要な営みであり、その向上と安定なくして豊かな人類の未来はあり得ないという信念のもと、理論と実践をとおして農学を理解し、創造力に富み、実行力のある人材を育成することを最も重要な使命であるとして実習教育に取り組んでいます。

(1)栽培技術論と実習

主として農学部2回生を対象に、週2回(月曜組および水曜組)の「栽培技術論と実習」を開講しています。学生の実習に対する関心は高く、多くの受講希望者がいます。実習では、その日の実習に関する講義の後、水田ではイネ・ダイズ、果樹園ではナシ・モモ・カキ、蔬菜畑・施設ではダイショ・タマネギ・アスパラガス、花卉温室ではカーネーション・コチョウラン・アジサイなどの栽培に関する種々の実技指導を行っています。



果樹園での学生実習

近年は、都会育ちの学生が増えていることから、この実習は農学と農業を結びつける上で非常に重要な役割を果たしていると思っています。

(2)少人数セミナー(ポケットゼミ)

全学の主として新入生を対象に、毎年夏期休暇に入ってすぐの頃に、10人前後の定員という少人数の農業体験実習セミナーを開講しています。本セミナーの人気も高く毎年数十人の希望者がいます。

なお、2007年度からは1クラス増やして、合計定員も倍増する予定です。受講者にとっては、農作業を初めて体験する者がほとんどであることから、本セミナーは農業の一端を理解するのに少なからず役立っていると考えています。

主な研究課題

本場に本拠地を置く植物生産管理学研究室では、「遺伝子研究から圃場まで」を研究の理念として、主として本場および古曽部温室において、イネの穀粒成分・ストレス応答、ダイズの機能性成分・トランスボゾン、アズノの自家不和合性遺伝子、バラ科果樹の休眠調節遺伝子、無核性ブントンの育種、カキ属植物の性決定遺伝子、マンダリンの核型、トマトの糖代謝に及ぼす高温およびジベレリンの影響、ダイショウの栽培・生理、コチョウラン・パフィオペディラムの組織培養、宿根花卉におけるロゼット現象のメカニズムなどに関する研究に取り組んでいます。実験室と圃場の両面での研究が効率的に行い得ること、種々の専門家の集合体であるという恵まれた条件を有効に活用できるよう心掛けています。また、学内の他研究室、他大学、国および地方自治体あるいは企業の研究機関との共同研究も実施しています。



実験材料の単為結果性ミニトマト

京都農場では、主に農学専攻所属研究室の不可欠な実験圃場として活発な教育・研究が展開され、国際的にも評価の高い多くの研究成果が得られています。

地域貢献

(1) 公開講座

一般市民を対象に毎年11月初旬に開催しています。附属農場の教員を含めて、農学研究科の教員を中心に各年3～4人の講師を選び、1人当たり2時間程度の講義を行っています。公開講座の人気は高く、毎年募集定員を大幅に超えた応募があります。2007年度は第11回を迎える予定です。



公開講座

(2) 技術指導

高槻市という町中であって、農作物に触れたことのない人達にとっては附属農場は貴重な存在で、緑の多い憩いの場ともなっています。見学者も多く、我々からみても珍しい作物を集めた「資源作物見本園」には特に強い興味が示されます。また、「柿の脱渋技術」など、実技指導を求めて来場される一般市民の方達も多く、丁寧に対応し市民との交流・農業についての理解の促進に努めています。



本場および古曽部温室へのアクセス

JR 東海道本線高槻駅あるいは阪急京都線高槻市駅から
徒歩約15分

本場

住所 〒569-0096 大阪府高槻市八丁畷町12-1
電話 072-685-0134 FAX 072-683-1532

古曽部温室

住所 〒569-1115 大阪府高槻市古曽部町2-30
電話 072-685-0221 FAX 072-685-0221